



<ラムサール通信>

2018年1月15日発行 第187号

●2018年はCOP13（ドバイ）を目標に活動します●

ラムサールセンターの新しい組織と運動を創造する年になります

ラムサールセンター（RCJ）にとって昨年は、25年ぶりに日本で開催したアジア湿地シンポジウムを成功させるなど大きな成果を残した一方、20年以上事務局を預かっていた中村玲子さん宅から、会員の大村弥加さんの旅行代理店「メープル・ツアーズ」に事務局が移転するなど、激動の年でもありました。

今年は、2月2日に「世界湿地の日記念シンポジウム」をWIJほかと共催するのを皮切りに、2月下旬のプレ COP13 アジア地域会合（スリランカ）への参加、6月のエコライフフェア、そして総会、ラムサール条約 COP13（10月・ドバイ）にAWS2017の成果をつなぐ準備を経て、COP13本体への参加などの活動が控えています。23年ぶりに日本で開かれる世界湖沼会議（10月・茨城）もあります。

昨年度の総会で、岩崎慎平さん（福岡女子大学准教授・RCJ 副会長）が、次期会長候補に承認されたことは以前にお伝えしたとおりですが、その岩崎新会長を支え、これからのRCJ活動をけん引する新しい体制をどうつくるか、次の目標はなにか、持続可能な社会をめざす新しいNGOの姿はどうあるべきなのか……、RCJの若い会員たちを中心に自主的な検討がはじまりました。

RCJの世代交代を実現し、国際的にも期待に応えられる組織づくりのために、会員のみなさんのご理解ご協力をお願いします。

●街の暮らしを支える湿地●

2018年「世界湿地の日」記念シンポジウムのご案内

ラムサール条約がイランのラムサール市で採択されたのは1971年2月2日。それを記念してラムサール条約では毎年2月2日を「World Wetlands Day（WWD、世界湿地の日）」と定め、世界各地でいっせいに湿地に関係したイベントを催すよう奨励しています。今年のWWDのテーマは、「Wetlands for a sustainable urban future」。それにちなんで、日本国際湿地保全連合（WIJ）が、環境省、RCJほかと協力して、2018年世界湿地の日記念シンポジウム「都市の湿地を守ろう～持続可能な未来のために～街の暮らしを支える湿地」を東京・青山の国連大学エリザベスローズ・ホールで開催します。詳しくは同封のチラシをご覧ください。1月31日までに登録が必要です。

岩崎さん体制を支える組織問題検討会のお知らせ

近いうちに、岩崎さんを囲んで、中堅・若手の会員有志によるブレインストーミング・ワークショップが予定されています。日時、場所など詳細未定ですが、参加・協力について個別に相談があったときには、どうぞご支援・ご協力をお願いします。

●第 101 回 RCJ ワイズユース・ワークショップ報告●
「アジア湿地シンポジウム 2017 報告会」 & 忘年会には 34 人が参加しました

2017 年 12 月 26 日（火）、午後 6 時～、地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）で開催した久しぶりの RCJ ワイズユース・ワークショップは、会長の安藤元一、副会長の磯崎博司、林聡彦、亀山保、武者孝幸、事務局長の中村玲子さんなど役員はじめ、山本賢樹、尾崎友紀、田辺篤志さんなど若い会員、WIJ、インテュムコンサルティング、FA ネットワークのみなさん、毎年、年末の忘年会だけで会える懐かしいお顔もあって、34 人が参加しての盛会でした。アジア湿地シンポジウムの 25 年ぶりの成功をともによろこび、これからの活動のゆくすえを祈って乾杯しました。

会員の参加は、安藤元一、磯崎博司、林聡彦、亀山保、武者孝幸、中村玲子、新井雄喜、鈴木詩衣菜、長倉恵美子、小山文大、土井正典、長濱幸生、前川公彦、大原みさと、大村弥加、富岡辰先、新田一仁、佐々木優、田辺篤志、尾崎友紀、後藤安子、山本賢樹、岡本嶺子、赤瀬悠甫のみなさんでした。

●福岡県北九州市、苅田町の広谷湿原の調査報告●

2017 年 12 月 23 日、浦田健作さん（日本洞窟学会会長）の案内で、福岡県北九州市と苅田町にまたがる広谷湿原を見学してきました。RCJ から島谷幸宏、名執芳博、武者孝幸、中村玲子さんが参加しました。広谷湿原は、西日本有数のカルスト台地として有名な「平尾台」の北東部にある、南北約 1 キロ、東西約 500 メートル、楕円形の碗のような盆地の草原です。浦田さんによれば、花崗岩と土石流で覆われた西側の斜面から流れ出る 40 を超える湧水がつねにあたりを潤し、小規模の湿原が形成され、点状に分布しています。最も南部の谷底にある湿原は「広谷湿原」として苅田町の天然記念物に指定されています。広谷湿原を流れ下った水は、その先にある鍾乳洞「青龍窟」に流入していることもわかっており、カルスト台地、湧水、川、湿原、鍾乳洞がセットになったユニークな環境です。

晴天に恵まれた年末の土曜日とあって、ハイカーや家族連れでにぎわう平尾台から広谷湿原へ向かう道に入ると、歩く人もほとんどいない独特の美しい景観の草原が眼下に広がり、冬枯れの草原探索を満喫しました。まだまだ日本には、こんなにすばらしい湿地が、ほとんど手つかずで残されていることに感動しました。

午後には、地元苅田町のステーキホルダーの方たちと、日本でもほかに例のないこのユニークな湿地をラムサール条約に登録する可能性について意見交換をしました。



（写真：浦田健作さん）